

俳人 成田千空研究会

千空研究

第13号

明日知らぬ我そして君君子蘭

—千空句版画—

藤田 健次

この句は、千空さん何歳の時の作だろう。そして、どんな状況の時生まれたのか。たとえば、知人のお葬式に奥様と一緒に参列し、その帰り道での会話。「ああ、おれも、いつぱったりゆくかわからないなあ」、「あたしだって同じよ」——なんてシーンを想像してみる。この句からは、晩年を迎えたお二人の、深い愛情を思わずにはいられない。

ところで、78歳の私もまた「明日知らぬ」身。果てる日も近い。第2句集「人日」から。

(版画家・会員／八戸市)



成田千空句「明日知らぬ」(Tenji) (健)

目次

明日知らぬ我そして君君子蘭

—千空句版画—

藤田 健次

1

〈回想の成田千空〉

千空忌を中心に

藤埜まさ志

2

「サンキュー」

山本こう女

3

「暖鳥」周辺

未津 きみ

4

〈千空点描〉書店は、わが人生の窓

5

千空資料研究⑤ 新資料カセットテープ

「千空自句自解」より〈下〉 西谷ともえ

6

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(12)

太宰治と成田千空 齋藤 美穂

7

〈成田千空資料再録〉⑫

永遠の青春性

原感情を大切にして

10

会員名簿・北極星

12

千空研究会の事業

① 詳細な年譜の作成

② 千空俳句データベースの作成

③ 関係資料の収集

④ 関係者からの聞き取り

⑤ 会報『千空研究』の発行

⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

⑦ 『合本 成田千空句集』の刊行

回想の成田千空

千空忌を中心に

藤 埜 まさ志

千空先生は昭和も最後の年となった昭和六十三年十一月北野民夫氏の後を継いで第四代萬緑選者になられた。以降平成十九年の十二月号までの十九年間選者・代表として萬緑を牽引されてきた。

魅力的な作品そして温かい選やお人柄での指導力でもって、千名を超える会員を擁する大結社に育てられた。年に数度五所川原から東京句会にお出ましになったが、その時には参加者百名を超える鈴なりの句会であったことが懐かしい。詩歌文学館賞、蛇笏賞を相次いで受賞され、まさに名実ともに萬緑の中興の祖であられた。

萬緑終刊時には高齢化もあって在籍者が約500名と半減しているが、内訳を見ると千空選以前の入会者130名、千空選以降の入会者270名、逝去後の入会者100名、殆どの会員が千空選時代に育っている。

筆者は平成十一年入会で九年間の千空選であったが、巻頭をはじめ十五回の選評を受け、第一句集『土塊』の「序」に使わせて頂いた。先生の病床を見舞われた森かつみ氏から句集への先生のお言葉をお伝えいただき恐縮したことも懐かしい。

それだけに先生を失った心の空白は大きく、毎年千空忌の句を詠んで手向けることとしている。それらの句を中心に先生の思い出を述べてみたいと思う。

書齋より目ン玉ざらり千空忌 まさ志

レンタカーでの旅の途中、成田書店はこのあたりかなと見回していると、店の中から目玉が光り手招きをしている人が。先生であった。店主の小さな席で市子夫人と書き物をなさっていたようだ。見回すと書店とは言え本棚には売り物でない贈呈句集などが雑然と。書店でもなく書斎でもない、これは書齋というべきものと思った。

最近、一戸鈴さんの句集に「跡形もなき師の書店濃紫陽花」を見付けて淋しい思いだがふかうら文学館の千空コーナーの書齋は永く残して貰いたいと願っている。



市子夫人を囲む連衆の笑顔 ―平成21年 萬緑全国大会―

夫人に市内を案内させるといってお申し出をご辞退してねぶた会館へ向かった。そこに大きな短冊の先生のねぶたの句が並んでいたのにも驚かされた。

千空を恋へば十一月の雪 まさ志

一昨年のこと、千空忌を詠もうと思いを巡らしたが小春日和が続きイメージを結ばずにいた。十九日、関東では珍しい十一月の雪となった。これこそ千空忌だと即吟。

千空先生のご葬儀には仕事の関係で駆け付けられなかったが、「月消して津軽野にまた雪しまく」(奈良文夫)等、当日は青森でも珍しい十一月の大雪であったと聞く。

岩木嶺は眠る火の山千空忌 まさ志

千空先生は「岩木嶺は大きく手毬唄やさし」等、岩木山を数多く詠んでおられる。津軽人にとって思い入れの深い山である。何回か岩木山を見るにつれ、津軽富士とよばれるその美しさだけでなくその存在感、力強さを強く感じるようになった。そしてそれは火山である岩木山の今なお内に燃え滾るマグマの存在からくるものと確信した。岩木嶺は先生そのもののものだ。

師なき郷藁焼く煙が土を這ふ 百子

農知らず枝のりんごを掌に量る 捷司

爽やかに先師夫人を取り囲む まさ志

平成二十一年の全国大会は千空先生の三年忌供養も兼ねて弘前市で開催された。菊ヶ丘公園の師弟句碑、真っ赤な林檎が鈴なりのりんご公園等懐かしい思い出。前二句は同行した仲間の作品。二人とも先生に傾倒していたが故人となってしまう。

吟行先に市子夫人も駆けつけられ、懐かしさに夫人を取囲んだ連衆の笑顔の輪も印象的であった。

草田男の碑へ千空の地の林檎 まさ志

二十四年の全国大会は東京・武蔵野の地で開催された。草田男の奉職した成蹊学園が学園横の小徑に草田男句碑を創立百周年記念事業の一環として建立したので、それを見学した。碑面は「空は太初の子妻より林檎受く」。草田男の代表句の一つである。掲句はその句碑に櫛引麗子さんが五所川原から立派な林檎を持参して献じられたのを詠んだもの。多くの共感者を得た句だ。

草田男には林檎の句が多く『草田男全句』に季語・林檎の句が48句、「オリオンと店の林檎が帰路の栄」のように他の季語に分類されている句を含めると50句を超える。そして千空先生は林檎の津軽の人。林檎といえは草田男・千空の両者を思い浮かべる人が多いことが掲句への共感者の多さに結びついたのだろう。そして草田男の句に「林檎掻き出し掻き出し盡きし其粉殻」がある。手に入れた林檎箱を釘抜で開け、粉殻の中の真っ赤な林檎を取り出した喜び、林檎を掻き出し、ついに粉殻だけになってしまった虚しさ、草田男の人間味があふれた一句。当時高価な林檎を教員の給料で一箱入手したとは考え難く、おそらく先生はじめ津軽からの到来物であったと思う。その他思い出に残る千空忌の句を記して稿を終えたい。

句帳持つ千空羅漢秋深し まさ志
泥葱をま白に剥けば千空忌 "
枝に笑まふ林檎わらしや千空忌 "
狂ひなき宗谷の羅針儀千空忌 "
朴落葉は銀の短冊千空忌 "
瞬ける荒星ひとつ千空忌 "

(俳人・「森の座」「群星」同人／千葉県流山市)

「サンキュー」

山本こう女

二〇〇七年六月十九日、太宰治生誕祭に出席の太宰の宿ふかうら文学館々長山田邦照氏に同行した。芦野公園の会場で千空先生をお見かけしてご挨拶をすると、「後で櫻庭美術館サ行ぐはんで来いへ」と言われた。式典終了後山田館長と伺うと、櫻庭先生の大作が壁一面を飾る一階ロビー中央の椅子に千空先生がにこにこして座っておられた。「先生、中央公民館の懇親会に出られないんですか」と伺うと、「これからベンセ沼サ行って俳句作るの。俳句なんぼでも湧いてくる」と仰言った。「さあ写真撮ってけれ、みんな一緒に」と櫻庭、山田両館長と居合わせた年輩の男性も誘って写真に納まりご機嫌だった。ベンセ沼に同行された樹の会の方のお話では、木道の途中にある展望所の木の床に、先生はお疲れの様子で大の字に寝転んだという。

やはりこの頃はお身体がきつかったと思われるが、それでも先生はあまたの小鳥の囀りが降りそそぐ至福のうちに、湧きあふれる俳句を楽しんでおられたと信じたい。

私が暖鳥に所属していた二十代の頃、成田書店の向いにある増田病院に入院したことがある。院長は増田木亘子という暖鳥の同人で、一度千空先生と一緒に句会に連れて行って下さった。私は緊張して句会名も何も覚えてないが、私が咳をするとうと木亘子先生が心配そうに背中 hands を当ててくれた。

ある日、千空先生が「平山五朗の俳句読んでみて、若くして亡くなったばての」と句集を数冊病室に持ってきて下さり、それから自然に成田書店におじゃまするのが日課のようになった。この入院期間こそ、ご迷惑も省みず一日数時間もご夫妻の傍で過ごさせて頂き、「俳句は人なり」と教えて頂いた何物にも代えられない貴重な至福の時間であった。

退院後も結婚後も、書店のガラス戸越しにわくわくしながらご夫妻のお姿を確かめておじゃました。お酒の肴を持参すると、「何？ めえ酒コ飲めるの」と相好をくずした先生が懐かしい。

ある日、書店におじゃまして「先生、体調どうですか」と尋ねると、「まいね、好きだ納豆も食べられなくなつた。こう女、祈ってけれ。こうしているのも萬緑の人たちだの、みんなが祈ってくれるお蔭だ。祈りは通じるはんで祈ってけれ。句集もう一冊出してははんでの」と、眼鏡の奥の目を細めて少し冗談っぽく言われた。すると傍から市子夫人が「他の人には大丈夫、大丈夫って言うのよ」と笑った。

それから数ヶ月後、母を西北病院に連れて行って、偶然先生が増田病院に入院されていることを知り駆けつけた。市子夫人が喜んでベッドの傍へ手を引いてくれて「こう女さんよ」と声をかけると、先生は私を見て頷いてくれた。いつも先生の快復を祈ってご親戚の方や樹の会の方々が、心を一つにして病室に集っておられた。

十一月十四日、先生はとても疲れた様子で眠っているように見えたが、ベッドの傍で「こう女です」と声をかけると、目をつむったまま思いがけないしっかりしたお声で「サンキュー」と一言。

万感胸に迫り涙があふれた。

先生は太宰の宿ふかうら文学館に「千空の間」ができたことを殊の外喜ばれて、作品その他の品々を萬緑と北上の日本現代詩歌文学館、太宰の宿ふかうら文学館に寄贈するつもりとお話下さった。市子夫人はふかうら文学館にと先生ご愛用のとっくりやコーヒークップなど持たせて下さった中にはふかうら文学館で頂くのは躊躇するような額もあったが、ご親戚の方々も一緒に私に持って帰るようにと仰言るので、とりあえずお預りして帰り山田館長に電話して翌日お届けすることになった。私はソファに額と先生の写真を置き「先生ようこそ」とコーヒートを淹れた。先生ご夫妻との思い出を走馬灯のように巡らせながら、四十余年の歳月の早さに驚き、その重さを噛みしめつつ、語り尽くせぬ感謝の思いを心ゆくまでお伝えすることができた。

「俳句は人、心根だよ。誰もみな句友」と仰言り、多くの方々に「千空仏」と慕われ、「先生こそ大人」と敬われた千空先生を、俳人として夫として信頼し敬愛して献身的に尽くされた市子夫人葬儀の際のご挨拶も気丈にご立派であった。

萬緑の会員でもなく、俳句に殊更熱心なわけでもなく、只々ご夫妻が好きでおじゃましていただけたのに、お別れの席は近親者の方々の中に入れて頂いた。

俳人として偉大な功績を残された千空先生と市子夫人、お二人の心の片隅に置いて頂けたことが何よりも嬉しく有難いことである。

千空先生が天上でも湧きあふれることを紡ぎ俳句を紡いでおられると信じつつ。

(俳人／深浦町)

「暖鳥」周辺

未津きみ

俳句とのかかわりは、遠い日のことだった。白樺の校舎といわれた青高女時代、先生たちが職員室で俳句会の席を設けられていると、風の噂のように聞いていた。その中で、どなたが先導をつとめられていたのか、知るよしもなかった。

戦後になり、青森空襲で焼失した校舎の代わりに、旧五連隊の兵舎が校舎となった。

青高女は将校クラブが教員室となり、庭には池があり、藤棚もあって、そこだけが戦後の荒くれた風景から切りはなされていた。その池のほとりで、書家である宮川翠雨先生から、さまざまなことを教わっていた。

例えばそのひとつが、かの太宰治が玉川上水に入水したときである。先生は、芥川龍之介が自死したときと同じ衝撃を受けたと話され、あなたたちにとっても忘れられないことになるだろうと言われた。また先生は私に、太宰の絶筆になった「グッド・バイ」を貸してくれた。読むには読んだが、女との別れ話がいんえんと続き、とんと私には理解不能であった。それに太宰治という名も、このときはじめて知ったような有様であった。

そんな私であるが、俳句の手ほどきをしてくれたのが宮川先生であった。

この頃からもとあった先生方の俳句熱が、校内俳句大会へとひろがりを見せはじめていった。教師生徒一体である。これは後年、寺山修司などにも引き継がれていったのである。よく寺山から

校内の俳句会への案内状を貰ったものである。その第一回校内俳句大会で、なんと私の句が最高点となり、一位となった。

私は、ぼかんと嬉しいうより、気が抜けた風船のようにただようばかりだった。ただ宮川先生が、あまりに喜ばれるので、そうなのかとじょじょに嬉しさがさざ波のように寄せてきた。その句は、

口柴の青さとどめて炭俵

まあいってみれば平凡な、あまり特徴のない作である。しかし十六歳の私にしては、地味で控目の表現であるところが、良かったのかも知れない。宮川先生は、すべて私の師匠であった。この頃の先生の句に、

すれちがうとき女カンナを燃やしけり

これは暖鳥に発表されたのかも知れない。私がこの句をほめると、先生はとても喜ばれて、「わがるがあ。これがわがるようだ」と、たいしたもののだ」と言われた。いまでもこの句が忘れられず、先生の著書を見るが、この句がみあたらず私としてはとても残念である。先生の代表句としては、この作としたい。

初硯水を注ぐや山河の声

こうして私はいつの間にか「暖鳥」同人になっていた。呑気なもので、すべて宮川先生おまかせである。私の二年先輩の今みきさん(小倉みき)と連れだつてのことである。いつも二人は行を共にし、俳句会にも出席したものである。そのときの「暖鳥」同人は、成田千空師をはじめ、吹田孤蓬、宮川翠雨、千葉菁実、柿崎無為、新岡青草、佐藤正夫、工藤忠一郎、吹田登美子、須見まさ、浅利

康衛、武藤翠峰、京武久美、寺山修司などである。それに今みき、梅木きみ(私の本名)である。

この同人の顔をみても、この今も身ぶるいいするほどである。こんな人々に囲まれているのに、呑気な私は五・七・五の世界に、どっぷり分け入ることはなかった。私のどこかに幼少の頃から、物語を書く人になりたいというおもいがあったのである。

この頃、職場が同じだった今みきと私はよく連れだって孤蓬さんのご自宅を訪問したものだ。孤蓬さんはふっくらとしたお人柄で、いつでも私たちを迎えてくれた。夫人の登美子さんは、竹を割ったような性格で、バリバリ音を立てて、人物論や作品論を展開し、その舌鋒は鋭く威勢がよく、聞いていても自分のなかによどんでいる穢れが、吐き出されるような気がしたものだ。またユーモアにも富み、忌憚のない意見の底には暖かな人へのおもいやりが流れていた。私のこれまでの人生で、登美子さんのような人には、二度と出会うことはなかった。

また柿崎無為さんは、同じ町内人であり、お嬢さんとは学友であったため、いつも暖かく接してくれた。新岡青草さんの営んでいたお店にもみきさんと訪れたものだった。武藤翠峰さんは、大きな銭湯の釜焚きをしていて、その作は強烈なエロチシズムの帯をその小さな身体に鮮やかに巻いているかのような人だった。まだ若年の人だった彼は、銭湯での仕事に満足していないのである。私の家へもよく来てくれて、私よりも母と仲良くなっていた。私にとって想出の人である。また須見まささんのことであるが、美しい女流は私たちの憧れの人でもあった。私たちの職場の近くで質屋を営

んでいた人は、戦争未亡人であった。月のように、遠く夜空に映えているような、はかなげな美しさであった。句会でも、幾度か顔を合わせていた。

ここでわが友、今みきさんの句をあげたい。

疲れやすくなり向葵の家へ帰る

眉にも雪父と呼ばびたき人ありぬ

どれを代表句かと迷うが、やはり、眉にも……をあげたい。

さて千空師のことであるが、若かりし頃より春風駘蕩の人であった。後年、作品にそのおおらかさが表れているとおもう。肩から力を抜いた作風は、師はすでにその全身像で作品を極めたのである。そして風土に根ざした創作者である。地の霊を呼びよせ、それを纏う大きな、柔らかなさがある。

大粒の雨降る 青田母の故郷

この句に接したときの私の歎び、農耕民族として生きてきた稲作への熱いおもい、その鮮烈な豊穰を両手で受けていた。またこの母の故郷は、私の母の故郷でもあった。津軽飯詰である。私の幼年時代、夏が来る毎に遊びに行ったところである。第二の故郷といっている。昭和20年8月15日である。飯詰は私の原点であり、ある意味で幼年時代の幸せで光り輝いていた土地でもあった。

千空師のこの句から受けとるものが多いのは、雨の音や田圃の稲が揺れる実りの豊かさが、波打ってくる大きなさである。

全国誌「萬緑」の選者を務めた師は、驕ることなく、いつも身近かに存在した。私のようにはやばやと「暖鳥」から抜けていった者に対して、言葉少なく柔かく接してくれた。このことは感謝

に堪えないことである。

もう一句、師の句をあげたい。千空師を表徴している句におもわれるからである。

ななかまどこの道ゆけばみんないる

(詩人／青森市)

【千空点描】

書店は、わが人生の窓

成田書店は、千空さんの書斎であり応接間でもあった。

千空さんは若いころから、画廊をかねたサロンのような書店を作りたいという夢を抱いていた。自分で設計図を描いて奥さんにも語っていたというが、経営がいつも火の車だったから実現することはなかった。

乱雑に本が積み上げられた書店も、それなりに居心地のいい空間だったから、絶えず人が訪れていた。そこで文人や画家が談論し、文化運動の拠点となっていた。実質的に夢は実を結んでいたのである。

書店は赤字つづきで、ひところは廃業も考えたようだったが、日記には、「書店は、わが人生の窓だから閉ざすわけにはいかない」と書いている。

返本の扉を束ね雪敷けり

(天門)

〈佐〉

千空資料研究⑤

新資料 カセットテープ

「千空白句自解」

平成16年6月 於成田書店より(下)

西 谷 ともえ

ふかうら文学館山田館長が開館準備のために千空さんを訪ね録音したテープの後半。(前半は前号に掲載)

「雪しろの本流に入る」の句。(引用者注 雪しろの本流に入る水多くば)かなり初期の句でないでしようか。このころしよっちゅう吟行していた。この道を歩けば俳句できるといふ道がある。俳句とは道を探せってよくいうの。バイパスなんかでは何も俳句なんかできるわけないんであって。このころはまだ、あれですよ。松島まで自転車であって。道外れの地蔵様にお願ひしますって言ってね。朝早く来てそこから一時間くらい歩くんですよ。曲がりくねって。曲がりくねるといふとそここのころに百万遍があったりお堂があったりとするわけです。村の生活と自然があるわけです。風土とは自然のことではないので。自然と人間が組み合わさって風土ができる。そういう意味ではないかにも人間の生活が自然の中に溶け合っている感じ、そういうことが特に「雪しろの本流に」にはある。雪しろは雪解水。雪解けの水が野原にわーわーとあるんですね。この場合は本流は岩木川のあたりを想像しているんですがね。春。雪しろは春。支流から本流にガッとして入ってくる。そうすると本流と支流の水の勢いがえくぼみたい

にこうなってくる。えくぼは春の喜びを伝える。雪しろの春、本流の方に入っていくという方向性がある。そこに前に向かっていく。水自体に喜びを感じる。水えくぼって言葉大好きだよ。杭なんかあると水の輪ができるんです。私が初めて発明した言葉。最近使われなくなりましたけれど。言葉をどう発見するか、俳句では大きい。たった一つの句が生きていく。「キミ」なんかも発見ですよ。読者の発見もある。そういうことじゃないですかね。

「雪国にこの空の青餅の肌」。これは雪国でも、深い雪国でも、晴れてくると真っ青な空の青さっていうのがある。特別青いんですね。雪国の晴れ、雪晴れの空ですね。餅の肌ときましたもんね。餅の肌というと空の青に対して柔らかい餅肌。餅肌なんです(笑)。それにもかかってるんです。ただ餅の肌でなくて喋らないけどメラハドのこともエロチズムっていうか、背後にある。雪国にも解放された空には空の青があり餅の肌がある。餅っていうのはこの場合は正月餅。柔らかい。昔の餅は味が強い。今の餅のように餅味が弱くないんですよ、昔の餅は。粘りがある。搗きにいくもんだ。ハンデ。足の強い、餅味の強いしかも粘りのある餅肌がありますので、雪国らしい。雪国の暗い生活でなくてね、暗い生活の中にも明るい空の青があり、餅の肌があるよ。元気が出てくる。美として。俳句は最後は美なんです。絵と同じように美として、成立しないという芸術にならないんですよ。この句は「雪国にこの空の青」と「リズムをまず取ってきて、次に空の青、そして

白い肌と一句の中に入ってくる。五七五の中に一気に入ってくるからよろしいのでは。

「白光の天上天下那智の滝」。那智の滝に町内旅行で行ったんです。町内理事と一緒に旅行するの。この町内理事50年くらい一緒にいる。よくわかっているんですよ。私はひたすら俳句を作っているんです。それ楽しくて行ってる。まあ、酒飲むのも楽しいですが。窓をずっと見ながら、停まることとで俳句つくっているのが楽しいわけで。佐渡島行った時は百くらい作ったんですよ。ひたすら作ってるんですよ。それみんな黙って、知らないふりして酒飲んでるんです。こっちはひたすら俳句。すごく助かるんです、町内旅行っていうのは。俳人同士で行けばね、ガヤガヤ話したりね、みんなお互いに競争ささるところで却って邪魔になるんですよ。こういうのは誰かといって一人孤独にやるというのが一番。町内旅行はいい、許してもらっているというか。そういう意味で恩を受けていますよ。これは那智の滝で作った。これは『白光』齋藤茂吉の赤光からとった。「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」ってね。あらゆるものには光があるということがある。赤いものは赤い光を発し、白いものは白い光を発する。全ては光を発するという仏教用語があります。その中で白光を取った時には、ずいぶん大胆なことすると言われた。知らないふりして使って見たら、これ何賞? ああ。蛇笏賞になった。これ、だから那智の滝に名句がある。水原秋桜子のね、「滝落ちて群青世界とどろけり」ってね。滝落ちてきて群青の世界が轟いている。これはそんな気分ではなく白い滝がわーってくと立っている。

仏像が立っている、そういう感じがした。だから白光という仏語を使ってきた。「天上天下那智の滝」ともってきた。これ宇多喜代子の「私の名句」の中入っていました。こういうものは女房に見せたことないんだけど。読んでみますか。

「白光の天上天下那智の滝 同じ那智の滝を成田千空は天上天下という宇宙発光体としてとらえた、白光の天上天下と言われてそうだ、あればまさしく白光の天上天下なのだと思う。心に残る名句とは自分もそう思っていたのだ。それをごんな風に表現した人がいるんだという」自分は手も足もでないですよ。こう言われるという。「こんな圧倒される気分を」みんなの作品あるかもしれない。「堂々として落ちてくる滝を群青世界とどろけり、白光の天上天下」とこれ奇襲作戦みたいでしょ。誰も言っていないことをズバツという。こう書いてましたけど。これ名句なの。私の名句って書いてますんで。これは十年くらい前の。『白光』ができたのが平成五年。

「妻老いて」はね。(引用者注 妻老いて母の如しやとろろ汁) この妻のことですけど。妻老いて、また母出てきましたね。妻が老いてしまうという妻自体がもう自分の妻でなくて自分の母のように、年行けばなってしまう。とろろ汁が効いてますね。「妻老いて母の如しやとろろ汁」こういうのがやっぱりだんだん核になってきてるでしょ。とろろ汁好きなんです。兄弟八人もあるところだね。子供に食べさせるとなんぼでも食べらさる。とろろ汁は時たましかやらないけど。とろろ汁ってことと母の如しやとろろ汁がダブってきてる

んですね。自分の母と。妻は母のように優しくないけれど、厳しい妻だけ。みんなこの句をね、金子兜太もね、授賞式の時「やあ、こういう句作られると参ってしまうな」って。みなさん、なかなか口出せないですね。自分の妻が年取って母になったって。万人がそう思っていることすばつと書いてしまつて、最後は季語のとろろ汁でピタツとしたところでどうしようもないと。とろろ芋は季節は秋ですね。難しいでしょ。解説書くに。

(終わり)

(県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市)

―永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(12)―

太宰治と成田千空

齋藤 美穂

病床での出会い

太宰治の故郷・北津軽郡金木町が五所川原市金木町となり十三年になろうとしています。太宰や斜陽館はもはや「わが街の話題」であるはずですが、太宰を知る人々にとって五所川原と金木の距離感はその思い出と相まって変わるものではありません。

私は結婚を機に五所川原で暮らしはじめてから三十年近くになります。教科書やジャーナリズムに登場する著名な作家・太宰治が、「在りし日の津島修治」として語られるこの街で、身近な人々

から太宰の話を聞く度に不思議な感じを受けたものです。太宰の存在が実感される一方で、作品そのもののへの評価が遅れたのも地元であるがゆえ、と耳にしたことがありました。

成田千空は太宰治の才能とその文学の魅力に触れ、早い時期から文学の師として太宰を意識していました。「永住の地・五所川原 成田千空をめぐる人々」の最終回は太宰と千空についてお話しします。

「私が草田男先生に俳句を教わろうと思ったのは、先生が単なる俳人だからではありません。私は太宰治と中村草田男が、本当の文学者だと思っております」草田男が十和田に來た時、朝、湖の畔で草田男にこう言ったんです。そしたら嬉びましてね。(千空対談 第二回小野正文「『文芸あおもり』第一三八号」)

今年没後七十年、若い世代を中心に今なお多くの支持を得る太宰は、青森県を代表する作家らに文学的影響を与えたことでも知られています。今官一、三浦哲郎、長部日出雄らと太宰との出会いは重要な意味を持ち、それが太宰文学の多様な評価ともなっています。では、千空はどのようにして太宰と出会い、その魅力について何を語ってくれるのでしょうか。

昭和十六年、千空は肺結核のために東京の就職先から帰郷し、絶対安静の病床で母の介護を受けて過ごしていました。生家の一室に蚊帳を吊り、吹雪の日にも窓を開けてじっとしていることは、あとで考えても「修行になった」というほど忍耐を要することでした。多くの青年たちが命を落と

した死病への恐怖、戦時の中で下の世話まで母に任せ、生きる意味を問う日々。本を読み、創作をして過ごすうちに千空は文学に活路を見出ししていきます。

太宰との出会いはちょうどその頃でした。小説、詩、俳句などの創作に手を染めながら、心もたく命をみつめていた千空はこの新進作家に瞠目しました。「どこが面白いかというと、その頃は内容よりも、言葉の持っているセンスのすばらしさとか切れ味の新鮮さ、そういうものを感じた」（「千空が語る故郷と文学」『文芸あおもり』第一五三号）。

身動きもままならず暗鬱としていた青年は、饒舌で親近感のある文体をもつ太宰の世界に魅了され、「助かった」と感じました。中央の文壇で注目されている郷里の才能、そして文学の放つ力を実感した千空はこの頃からのめり込むように太宰の作品を読み始めました。文学に生きるという命題に立ち向かい、清新な表現を求めて時代を先行する太宰と草田男の姿は千空の生きる力となっていたのです。

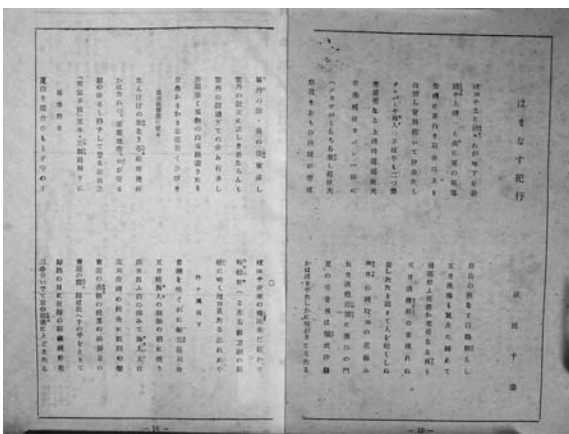
愛かなしい故郷

「私はやはり祖先のかなしい血に、出来るだけ見事な花を咲かせるやうに努力するより他に仕方がないやうだ」という、太宰治のことに共鳴しました。それが彼の文学の理由であり、ならば私の俳句の理由でもありました。（成田千空『俳句は遊びの文学』）

千空は太宰と郷里である津軽の同じ時代を生きました。その意味で太宰作品の厳格な読者であり、太宰の作品の外と内にそれぞれ存在する「愛かなしい

故郷」を感じ取っていたことでしょう。

生前、千空は疎開中の太宰を訪ねて行き、豪壮な邸を前にして何を話せばよいのかためらわれ、会わずに戻ってしまいます。その後、作品から太宰の死を予感した千空は、「どうか死なないでください」と手紙を書きました。その憂慮は現実となり、愛人とともに入水した太宰は一週間後に遺体となって発見されます。昭和二十三年六月十九日、三十九歳の若さでした。千空は太宰の死に大きな衝撃を受けます。



——太宰が郷里をめぐる旅で目にし、感じたものから「津軽」を残したのだとしたら、自分は俳人として何を吐き出せるのか——。

千空が『津軽』の中で最も触発されたのは龍飛岬の

写真Ⅱ太宰治『津軽』と千空の「はまなす紀行」

（暖鳥）掲載

場面でした。太宰は「ただ岩石と水である」本州北端の海岸を歩き、翌朝思いがけなく美しい童女の手毬唄を聞いて「たまらない気持ちになった」と綴っています。二十四年、直接的には届かなかった太宰への思いと文学への執着を旅の伴として、千空は龍飛岬への単独吟行を決行します。

玫瑰や土をどとつ納々わが地下足袋
纜つなや上磯一と曲に夏の氣運
藻刈舟磯の校舎に教師の聲

太宰に触発されたこの吟行は、自他共に認める千空俳句の転機をもたらしました。「内心、太宰の『津軽』とたたかって」詠んだという俳句は、二十五年、「はまなす紀行」（四十句）として『暖鳥』四十一号に発表されます。青森県板柳町の俳人で、千空とともに萬緑で活躍した川口爽郎は、「はまなす紀行」を読む『萬緑』（二十八年二月）の中で、「鋭い先天的な感性に貫かれた千空の第一期作品に対して、この感覚を持続しつゝ真摯な人間的苦悩から詩心の深さに立至った千空の第二期作品の始まり」と論じ、千空俳句の確かな変化を指摘しています。

風土性という感性が自分の内部から掌握されて出て来た。自ら行って歩いて自分の足で捉えたこと。げっそり痩せるぐらい推敲し発表しました。暖鳥でも評価され中央でも評価される。このときに自分の俳句の有様を掴んだような気がします。作家を通して故郷が表現され、それが普遍化するということです。

（前出『文芸あおもり』第一五三号）

龍飛岬は県内といっても太宰と千空にとって郷里から遠い未知の土地でした。そこへ心身を投げ出し、「予知できない俳句を生み出す興奮を覚えたい」という千空は、太宰の『津軽』とともに、作品の中の「普遍化した故郷」を示したと言えるのではないのでしょうか。

太宰が過ごした五所川原

文献によると、太宰が過ごした頃の五所川原は商業都市としてめざましい発展を見せていました。橋や新道や鉄道が開設されて人馬の往来が増え、と、軒並みに続く商店の他に旅館や料亭が繁盛し始めました。銀行、病院、公共施設などの小粋な佇まい、東北随一と言われた豪商の布嘉郎は三六〇〇坪の屋敷を高さ十二メートル余りのレンガ塀が囲む威容を誇っていました。津軽平野の農村の需要を一手に引き受けた商都・五所川原には、各業界で熾烈な競争が繰り広げられたそうです。「善くいえば、活気のある町であり、悪く言えば、さわがしい町である」と太宰が書いた五所川原町の人には、ねぶたの掛け声である「ヤッテマレ、ヤッテマレ」を地で行く氣勢があったと想像します。大正五年、太宰は幼少の頃から慕った叔母キエ一家が五所川原へ分家すると、共に引っ越し二ヶ月余りを過ごしました。幼少期の思い出がたくさんある叔母の家は、太宰が成人すると「こわい人もないので、少し飲みすぎて」しまうような場所になります。金木まで約三里、敷居の高い生家を訪ねる行き帰りに、一息つかせてくれる人々が住む賑やかな町、それが太宰にとっての五所川原でした。「かりに東京に例をとるならば、金木は

小石川であり、五所川原は浅草といったようなところでもあるか」と、自由な空気と人間味にあふれた当時の町を太宰はそう表現しています。人口の何倍もの人が行き交ったという五所川原の町。昭和十九年七月に完成した新風土記叢書「津軽」に綴られたその町並みが、その四ヶ月後の大火によって焼失するとは誰が予想したでしょう。

奇跡的に大火の被災を逃れた津島家の蔵で暮らし始めた叔母を訪ねて、太宰はたびたび五所川原へ足を運びます。親戚が集まってお酒を飲み、太宰の話を楽しみました。再従兄弟で旧家・湊平山別家の当主（故人）は、「酒瓶に少しだけ酒を残す理由を聞いたら、こうすると明日も飲む理由ができるからね、とこっそり教えてくれた」と笑っていました。そのほか、旧制弘前高校時代の友人、疎開中に交流した金木の文学青年たち、親身になって世話をした呉服商の中畑慶吉親子……。地元の若者たちに自作を語り、誰からも好かれていたという太宰。五所川原の町には太宰の素顔を知る人々が行き来し、そうした人々の中には、後に千空と接点を持つ人々も少なからず存在しました。市井に交わった太宰を身近に感じられる五所川原は千空にとって太宰と共有する第二の故郷なのです。

千空の中の太宰治

存へて草むすばかり桜桃忌 千空

（句集『忘年』）

この句は平成七年、千空は七十四歳でした。太宰への敬慕と自省の念を忘れず俳句に懸けた年月は五十年を経過していました。千空は人間の弱さを克服して、俳句の道を成し遂げたいと常に心し

ていたように思います。

僕は何とかして僕の俳句を、芸術と名のつくものにしたいのだ。道端の雑草に終らせたくないのだ。それには一日も早く、この「安住出来ない」気持ちを超越する必要がある。少しも嘘にならないで「安住」出来たら、しめたものである。そして、それぞれの感性を大事にして、その感性を通じて表現すれば、確実に文学性がでてくるはずだ。

（昭和22年「飯詰日記」 県近代文学館蔵）

敗戦後、飯詰村での帰農生活を綴った日記には、俳句以前の問題に直面し自問自答する千空がいました。「安住」出来る気持を持つことは容易なことではありません。それは生来の資質の上に、千空のたいへんな努力によって構築されていったものであると思います。「少しも嘘にならない」自分の在り方を太宰も作品に綴っています。

一日の労苦は、そのまま一日の収穫である。「思い煩うな。空飛ぶ鳥を見よ。播かず。刈らず。蔵に収めず。」……私の書くものが、それがどんな形式であろうが、それはきつと私の全存在に素直なものであった筈である。この安心は、たいしたものだ。すっかり居直ってしまった形である。（「一日の労苦」太宰治）

私は千空を通して太宰作品の魅力を見直すことになりました。先のない苦悩に寄り添い、自己を肯定する言葉を残して太宰治は千空の中に生き続けたのです。（千空研究会調査研究員／五所川原市）

成田千空資料再録⑫

「中村草田男読本」

『俳句』 昭和55年10月15日（臨時増刊）

永遠の青春性

成田 千空

去る六月、東京で行われた萬緑全国大会に私は何年ぶりかで参加し、中村草田男師にお会いした。全国大会には四、五年に一度くらいしか私は参加しないので、人々がなつかしい。ただ、今度は先生のお足が大分弱っておられることを目撃して、これからの大事な時間、ものぐさ太郎を決めこんでばかりも居られないと思ったのは事実である。演壇に上るのにかなり不自由な様子で、踏みこんだ右足にしっかりと重心を移してから、左足を運ぶ。すでに高齢の足どりである。だが、けっして人手を借りようとしなない。のみならず、一定の場所に両足を据えて立った姿勢がじつに確かであった。少年のころから先生は典型的な外向き足であって、姿勢がよかったようである。今も高齢なりにその姿勢を保ち、立場を守っておられる。私はふと、ストリンドベリーについて語った先生の言葉を思い出した。ストリンドベリーにとっておそらく最後と思われる誕生日に、後進の作家達を招待し、歓談を尽くしたあとに、みんなが階段を下り、ドアを開けて、外へ出ようとした時、階段の上に彼が立って手を振り、大きな声で「青春万歳」と叫んだという。ストリンドベリーはよろよろするような足を踏みしめて、後進の人達を階段の上から見下ろしていた。よろよろしてもス

トリンドベリーは真の芸術家であり、その最後に立っている階段上のその場所は、彼にとって現在只今における永遠の青春の場であった、と先生は説くのである。先頃、津軽においてになった加藤楸邨氏も「草田男さんは足は弱ったが、頭の明晰さには驚く」と言っておられた。その楸邨氏も高齢期を迎え、海拔百メートルほどの丘を登り切れないほどになっておられた。歩行者楸邨にしのび寄る時間が見えて、感慨を覚えたが、氏も又精神と情熱において第一線の作家ではある。この夏、草田男、楸邨という現代俳句の先達の在りのままの姿に接し、所謂人間探求作家の齢を超えた気力を感じ得たのは幸いであった。

今度の萬緑全国大会での草田男講話は再び「軽み」の問題で、石川啄木の一首に触れて感想を述べられた。「手が白く且つ大なりき非凡なる人といはるる男に会ひしに」——「手が白く且つ大なりき」の「且つ」は同時性を表わすもの。その手は洗練された手でありながら、同時に野性的な大きな手である。そして「非凡なる人といはるる男に会ひしに」と続く。荒削りで、叩きつけるようだが、非常にうまい。そういう機会にぶつかった驚きを、あざやかに表現している。さて、洗練されていることと活動的で気力がこもるということは別のことではない。芸術の世界はうまくなければいけないが、それは我々の詩的念願がたぎり立って奥行のある重みのある世界が底になければ駄目だ。「軽み」という洗練された手法だけのものは邪道である。というのが講話の要旨であった。

正直に言って、私はまだ草田男俳句の全貌をとらえ切っていない。その表現の領域の広さと深さにおいてとらえ切れないスケールを持っている。実は秀れた軽味の作品もすくなくないのである。だが、先生は峠を次々と越え、創ってゆく、永遠の青春性を念願している。その創

造過程で、初期の句集『長子』（昭和四年～十年）から『火の鳥』（昭和十一年～十四年）への移行に最も新鮮で強烈な力を覚えるものである。

蜥蜴の尾鋼鉄^{スチール}光りや誕生日
曼珠沙華落暉も藁をひろげけり
オリオンと店の林檎が帰路の栄^栄
冬すでに路標にまがふ墓一基
冬の水一枝の影も欺かず
秋の航一大紺円盤の中

写生といっても今日鑑賞に堪える作品は写生を骨法としつつ、近代人的なするどい感覚と純粹な感情の表現であり、容易に風化しない作品群である。『火の鳥』は更に、草田男の特異な個性が人間^{ヒト}という普遍の世界で獲得した作品で充満している。

焚火火の粉吾の青春永きかな
吾妻かの三日月ほどの吾子胎すか
桜の実紅経てむらさき吾子生る
萬緑の中や吾子の菌生え初むる
雛の軸睫毛向けあひ妻子睡る
妻抱かな春昼の砂利踏みて帰る
蒲公英のかたさや海の日も一輪

もう一つの特徴は、群作「岩の濤・砂の濤（犬吠行）」、「九十九里行」、「火の鳥三日（伊豆大島行）」において俳句表現の可能性を力強く拓いたことである。それはその後の現代俳句に群作試行をもたらした記念すべき仕事だったと思う。当時の草田男は多くの青年を俳句に引きつけ、影響を与えた点で、瞠目すべき存在であったことを、今日の俳壇と照応して、私は言いたいのである。

原感情を大切に

成田 千空
(萬 緑)

俳句をつくる場合、私は対象に触発した最初の感情又は感覚を大事にします。対象は外部の自然界や人間界にかぎらず、内部の思考そのものが触発の対象になる場合もあります。しかし外部の自然界や人間界といっても、触発はすべて内部の出来ごとで、こいつはどこから来たか、詮索する間もなく最初に動いた感情を大事にするというわけです。これを私は仮に原感情と名づけています。この原感情からすぐ直観がひらめく場合もあり、作句過程で意識とからみあって句帖が真っ黒になるほど表現を模索する場合もあります。

原感情は予定感情や作為をもってしては測ることの出来ない不思議に生々しい感情ですが、非常に消滅しやすいものですから、それを保持してゆく心の張りが作句過程を支え、幾分でも類想や類型から脱することが出来るように思われます。

私の場合、自然発生的な原感情をそのまま表現したり、対象をありのままに表現するのではありませんが、一句の生気を保つ要素としてふまえているといえます。作句過程で、さまざまな意識やイメージが働きますが、それらがどのように原感情から転化しても、血のつながりがあります。ただ原感情が直観に結びつく場合、私としてはいちばん俳句らしい表現の凝集が遂げられるようです。季語も季語として意識するより、純粹な心情で把握され、表現の凝集に強く作用した場合、句作の味を覚えます。

妻が病む夏 組板に微塵の疵

昭和二十七年作。作った当初、こんな私生活的な俳句など発表する気になれませんでした。が、私生活全般の不平衡と、その中心部を摘出したかたちに思い当って発表しました。

妻が居ない厨に組板が乾いたまま置かれていたのが発端です。乾いた組板に微塵の疵を発見したことが、「妻」というものを発見したのと同じ切実さで心の琴線に触れました。その時、「夏」と「微塵の疵」、「病む」と「微塵の疵」が殆んど直観的に結びつきました。作句行程なものない、一氣に出来た句です。

組板には妻の生活と心が克明にきざみ込まれてとり残されている。それを見てしまった私も組板と一緒にとり残されている。

その因果関係が、私の生活にある危機を告げたことで、私が、私を発見したこともなります。原感情と直観が一氣に結びついた例です。

雨の浮葉なまなかとぶ鴉なり

昭和三十一年作。津軽地方の湿地帯を歩いて出来た句です。いわば自然詠ですが、自然をそのまま詠んだわけではありません。鴉を詠んだ句では「雪の群鴉めいめいの眼の近し遠し」という句もありますが、「なまなかにとぶ鴉」の句作はただ一羽の鴉が対象でした。

湿地の空低くとぶただ一羽の鴉。その羽づかいはいかにも重く、すぐ降りては又とび立つ、その生感を、「なまなかにとぶ」と観じたわけです。鴉は眼前の存在ですが、私の心象にもなっていました。「なまなかにとぶ鴉なり」という語句が最初に口を衝いて出たとき、それは私自身の暗喩でもあったわけです。両刃のやいばです。そして、なまなかにとぶ鴉を生かす表現過程でいくつ

かのイメージが浮沈し、「雨の浮葉」という表現にたどり着きました。

とはいっても、この語句だけ別個に考えて付けたのではなく、発想から表現に到る過程全体のムードやイメージの生動を経て捉えたわけです。

風土感情と一種の浮生感が纏綿した表現だったはずですが、一句全体の成り立ちは結局直観に拠っています。

私の場合、原感情がどのように多様な意識とからんでも、直観像を結ばなければ俳句という短詩型に成らないようです。

蚊ゆらゆら顔を拭き消し描く眉

昭和三十五年作。ひとが己れの顔を粉飾するのを揶揄する気で作った句ではなく、「顔を拭き消す」と観じた時の戦慄感のようなものに端を発して出来た句です。拭き消された人の顔と私の関係はすでに不平衡です。そのアンバランスと原感情のおどろきが最後までついてまわって「蚊ゆらゆら」という表現になりました。

独断といえは独断ですが、独断をおそれては発見がおぼつかないのです。私が俳句をつくるということは、私

が何かを発見することでもあります。

「天地人」に千空句引用

東奥日報のコラムに引用された千空さんの句。

あつあつの飯に納豆旅終る
12月10日
しばるるや土鳩こつこつ戸を叩く
1月21日
しばれ戸をこじ開け来たり手力男
〃

『合本 成田千空句集』を出版します

千空研究に、6冊の句集と雑誌を繰っているうち、
〈合本があれば便利〉と思い始めました。そこで、市子
夫人の諒解を得て編集を進めています。6冊の句集と没
年の句を1冊とし、索引を付けます。A5判並製、予価
2500円＋税で、年内に出版の予定。

寄贈感謝

浅利康衛さん（青森市）『まほろば』12・1・2月号
佐藤陽子さん（青森市）記念切手たくさん
清水雪江さん（藤崎町）千空関係新聞切抜、『未来』『俳句』
のコピー

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。
1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）
2. 回想の成田千空（2000字以内）
締め切り 第14号は4月末、到着順に掲載します。
送り先 （下段発行所、青森文芸出版あて）

* Eメールで送信くださる場合

sasaki@a-bungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員とし
てご登録ください。会費は年1000円です。

今年の会費をお願いします

今年の会費1000円を同封振替用紙により納付くだ
さるようお願いいたします。
なお、次の方々は納入済みです。

荒谷信子、葛西幸子、佐藤陽子、寺門資子、高井まさ江、
中島義雄、中村雅之、成田市子、藤埜まさ志、矢須恵由

会員名簿（61名）

敬称略

〈青森市〉 浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、
佐藤陽子、高森ましら、中島義雄、
成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、
野村正彦、浜田しげる、未津きみ、
吉田州花
〈弘前市〉 阿保子星、石崎志亥、泉 風信子、
市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、
佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、
成田圭子、三上弘之
〈藤崎町〉 清水雪江、世良 啓
〈八戸市〉 上條勝芳、小林凡石、仁科源一、
藤田健次
〈十和田市〉 米田省三
〈五所川原市〉 会津明郎、荒閑映子、一戸 鈴、
葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、
齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、
佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、
浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉 木村玲子
〈中泊町〉 外崎文夫
〈つがる市〉 兼平一子、中村雅之
〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女
〈岩手県盛岡市〉 瀬川君雄
〈茨城県那珂市〉 永山憲子、寺門資子、矢須恵由
〈茨城県水戸市〉 糟谷雅枝、小泉光子
〈茨城県日立市〉 高井まさ江
〈千葉県流山市〉 藤埜まさ志
〈大阪市〉 川東郁代

☆北極星☆

○東奥日報のコラム「天地人」に千空句が引用された。
（11ページ参照）新聞で名前を見ると、千空さんを身近
に感じて心が温かくなる。

○『わが心の〈千空〉』が好評である。小誌の「回想の
成田千空」を一冊にしたものだが、俳人以外にも、さ
まざまな千空観があってもいい。

○まだお書きになっておられない方は、どんな小さな思
い出でも、ぜひご寄稿頂きたい。それがすべて千空研
究の有益な資料となるのだから。

○地元から始めた小さな会だが、少しずつ会員が増えて
いる。ことに『萬緑』時代の千空と交流のあった県外
の方の入会はうれしい。これまでと今回の「回想」
―に萬緑時代の思い出が寄せられている。

○評伝とは別に『合本 成田千空句集』も出版の準備が
進んでいる。索引を付した1冊本は、新しく千空俳句
を読もうという人や、引用や研究をする人々の役に立
つことだろう。

○今年は没後11年、心を引き締めて千空忌までに、評伝
と合本句集を刊行したいと願っている。

2018年2月20日発行
会報『千空研究』第13号

非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

FAX TEL 0173-35-5323
0173-35-8414